

石元泰博 略年譜

Profile

石元泰博 略年譜 Profile

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
1921 大正10	0	6月14日、父・石元藤馬、母・美根の二男一女の長男として、サンフランシスコに生まれる。両親は、高知県高岡町（現・土佐市）からの農業移民。	
1924 大正13	2-3	両親の郷里である高知県に両親、1923年生まれの弟・貢とともに移住。3年後に妹・弥生誕生。	
1928 昭和3	6-7	灘・鳴川尋常小学校（現・高岡第二小学校）入学。	
1931 昭和6	9-10	菓子の景品で当たったボックス・カメラで、初めて写真を撮る。	
1934 昭和9	12-13	高知県立高知農業学校（現・高知県立高知農業高等学校）入学。第10代校長の小川重雄の教育に感化される。在学中にサッカーから陸上に転じ、800、1500メートル走で全国大会（神宮競技場）に出場して優勝。	
1939 昭和14	17-18	高知農業学校を卒業後、近代農法を学ぶために単身渡米。父親の知人の農場を手伝いながらカリフォルニア州にあったスクールボーイの身分でジュニアカレッジに通学、のちにアメリカ家庭にホームステイし、カリフォルニア大学農業スクール（パークリー校）に学ぶ。	
1942 昭和17	20-21	第二次世界大戦のため、マセド仮収容所に、次いでコロラド州の日系人収容所アマチ・キャンプに収容される。消防夫として就労するかたわら、シルクスクリーンの技術を習得。カメラの所有が許され、同好の仲間に技術を学び、キャンプ内を撮影。収容所時代、日系人ということで収容され米軍兵士として戦線に送られることに憤慨して、メンバーの新聞に詩を投稿して掲載される。	
1944 昭和19	22-23	終戦を待たずにキャンプから出ることは許されたが、沿岸地方に行くことを禁じられていたため、内陸の都市イリノイ州シカゴに行き、シルクスクリーン制作などで生活の糧を得る。	

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
1946 昭和21	24-25	ノース・ウェスタン大学建築科に入学するが1年で退学。この頃、日系人写真家ハリー・K. シゲタの紹介で、シカゴのアマチュア写真クラブ「フォート・ディアボーン・カメラ・クラブ」に入会。ジョルジュ・ケペシュ『ランゲージ・オブ・ビジョン』、ラースロー・モホイ＝ナジ『ビジョン・イン・モーション』などに触発されて写真に開眼、カメラクラブで好評を博す。	
1948 昭和23	26-27	シゲタの勧めもあって、ラースロー・モホイ＝ナジが設立したバウハウスの流れをくむシカゴのインスティテュート・オブ・デザイン（通称ニュー・バウハウス、1949年にイリノイ工科大学に併合）の写真科に入学。ハリー・キャラハン、アーロン・シスキンらに学ぶ。	
1950 昭和25	28-29	『ライフ』誌の「ヤング・フォトグラファーズ・コンテスト」に入賞。	
1951 昭和26	29-30	モホイ＝ナジ賞（インスティテュート・オブ・デザインの学内賞）を受賞。16ミリ映画「The Church on Maxwell Street」を学友マーヴィン・E. ニューマンとともに撮る。	
1952 昭和27	30-31	再び、モホイ＝ナジ賞を受賞。6月13日、イリノイ工科大学インスティテュート・オブ・デザインの写真科を卒業、写真で学士号取得。	
1953 昭和28	31-32	3月19日に来日。ニューヨーク近代美術館の写真部長エドワード・スタイクンの依頼により「The Family of Man」展のための日本の出品作品収集にあたるが、日本側の十分な協力が得られず、日本の写真家の作品を集めることができなかった。スタイクンの紹介で、「Architecture of Japan」展のため来日したニューヨーク近代美術館の建築部長アーサー・ドレクスラーに同行し、建築家・吉村順三らと京都、奈良などを視察し、日本の伝統建築を調査する。その際、桂離宮も訪れ敷石を撮影する。国際デザインコミッティー（現・日本デザインコミッティー）の創立メンバーとなる。	「always the Young Strangers」展（ニューヨーク近代美術館） 「現代写真展 日本とアメリカ」（国立近代美術館、東京）
1954 昭和29	32-33	5月、1ヶ月間桂離宮の撮影を行う。『U. S. Camera』年鑑に作品が掲載される。桑沢洋子の依頼で、桑沢デザイン研究所（東京）の開校にともない、講師として写真を教える（1971年退任）。	個展（タケミヤ画廊、東京）

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
1955 昭和30	33-34	実験映画「キネカリグラフ」(大辻清司、辻彩子と共作)を制作。	「The Family of Man」展 (ニューヨーク近代美術館、日本を含む世界各国を巡回) 「第2回 “グラフィック集団”展」(銀座・松屋、東京) 「Subjektive Fotografie 2」(共著) Brüder Auer Verlag, München 「カメラが抱えた朝倉文夫の彫塑」(大辻清司との共同制作) 美術出版社
1956 昭和31	34-35	川又滋と結婚、勅使河原蒼風と丹下健三を仲人(後見人)に国際文化会館で会費制の祝宴が催される。「日本のかたち」を雑誌『世界』5月号に発表。	「今日の写真 日本とフランス」(国立近代美術館、東京) 「第3回 “グラフィック集団”展」(銀座・松屋、東京)
1957 昭和32	35-36	「日本のかたち」「桂離宮」で第1回日本写真批評家協会作家賞を受賞。「ヌード」を撮影(1958年まで)。堀内誠一のアートディレクションで千代田光学精工(ミノルタカメラ、現コニカミノルタ)から「石元泰博コレクションカレンダー」発行。	第1回「10人の眼」(59年まで3回開催) (小西六フォトギャラリー、東京)
1958 昭和33	36-37	千代田光学精工の援助を得て、滋夫人とともに12月に渡米、1961年までシカゴに滞在する。この頃からカラーによる多重露光のシリーズを制作し始める。	「日本主観主義写真展」(富士フォトサロン、東京) 「ある日ある所」芸美出版社
1960 昭和35	38-39		個展(シカゴ美術館) 「現代秀作展」(61年、63年)(国立近代美術館、東京) 「KATSURA—日本建築における伝統と創造」 (丹下健三、ワルター・グロピウスとの共著)造型社(日本語版)、 イエール大学(英語版) 「アルバム戦後15年史」朝日新聞社
1961 昭和36	39-40	12月に帰国し、神奈川県藤沢市の写真家・影山光洋氏宅の離れに住む。	「Diogenes With a Camera V」(ニューヨーク近代美術館)
1962 昭和37	40-41	東京総合写真専門学校の教授に就任。「シカゴ、シカゴ」展でカメラ芸術賞(雑誌「カメラ芸術」主催)を受賞。「御陣乗太鼓」を撮影(1964年まで)。	「石元泰博写真展 シカゴ、シカゴ」(日本橋・白木屋、東京) 「NON」(銀座・松屋、東京)
1963 昭和38	41-42	「東京の顔」を「カメラ毎日」に連載(1-12月号)。	
1964 昭和39	42-43	ニューヨーク万国博覧会日本館(建築・前川國男、会場構成・亀倉雄策)で「日本の産業」をテーマにした写真壁画を制作。日本、フランス、イタリア、カナダ合作のオムニバス映画「思春期」の日本編「白い朝」(監督・勅使河原宏)の撮影を担当。	「日本の産業」(ニューヨーク万国博覧会日本館)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
			竹中工務店の企業誌「アプローチ」の創刊に参加、以降も同誌に作品を提供する。
1965 昭和40	43-44	「カメラ毎日」の表紙を1年間連載。同誌に東松照明、長野重一との「共同制作シリーズ」を掲載。	「Photography in the Twentieth Century」Horizon Press
1966 昭和41	44-45	新設の東京造形大学写真科にて写真を教える。雑誌「SD」の依頼でシカゴに1カ月滞在してシカゴ派建築を撮影。翌年の「SD」2月号特集「シカゴ派—その文明的背景」に写真160点以上を掲載。	
1967 昭和42	45-46		「Photography in the 20th Century」展 (ナショナル・ギャラリー・オブ・カナダ、オタワ)
1968 昭和43	46-47	「ポートレート」を撮影(1969年まで)。	
1969 昭和44	47-48	東京総合写真専門学校教授を退任。7月、日本国籍を取得。以降、日本を拠点として活動。	「シカゴ、シカゴ」美術出版社
1970 昭和45	48-49	写真集「シカゴ、シカゴ」により昭和44年度毎日芸術賞を受賞。	「日本万博の建築」朝日新聞社(写真提供)
1971 昭和46	49-50	桑沢デザイン研究所を退任。5月、東京都品川区に転居。7月、中近東へ取材旅行。	「NIPPON THEMES 12”×10”」 (ブラハ・インターカメラ‘71)
1972 昭和47	50-51	東京造形大学を退任。父・藤馬が85歳で没。	「都市」(映像の現代8)中央公論社 改訂版「桂—日本建築における伝統と創造」(丹下健三との共著)中央公論社(日本語版)、イエール大学(英語版)
1973 昭和48	51-52	京都・教王護国寺(東寺)で、国宝の«伝真言院両界曼荼羅»を撮影。「アプローチ」春号から多重露光写真の表紙掲載が始まる。	「人間革命の記録」(富山治夫との共著) 写真評論社・創価学会
1974 昭和49	52-53	「New Japanese Photography」展(ニューヨーク近代美術館)に「桂」を出品。	
1975 昭和50	53-54	南米、中近東、北アフリカ、オーストラリアへ3ヶ月間撮影旅行。	「日本現代写真史展 終戦から昭和45年まで」 (西武美術館、東京)
1976 昭和51	54-55	「太陽」に「古風土記」(文=松本清張、写真=石元)を連載、翌年8月号で15回分が完結する。	「剣持勇の世界 第1巻「その結晶の核」」河出書房新社(撮り下ろし写真提供)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
1977 昭和52	55-56	イスラム、スペイン、トルコ、インドへ1ヶ月間撮影旅行。	「石元泰博写真 曼荼羅展」(西武美術館、東京／西武百貨店大津ホール、滋賀、ヨーロッパ各地を巡回) 「The Photographer and the City」展 (コンテンポラリー・ミュージアム、シカゴ) 「伝真言院両界曼荼羅」(限定版) 平凡社
1978 昭和53	56-57	「伝真言院両界曼荼羅」の写真集と写真展で芸術選奨文部大臣賞、日本写真協会年度賞、世界書籍展(東ドイツ、ライプチヒ)の「世界で最も美しい本」金賞を受賞。中国へ2週間視察旅行。	「石元泰博写真 曼荼羅展」(国立国際美術館、大阪) 「出雲の神々ー古代の旅1」(谷川健一との共著) 平凡社 「国東紀行」(日本の美2) 集英社
1979 昭和54	57-58	木村伊兵衛賞の審査員を勤める(～1983年)	個展(ギャラリー・アイハート、東京) 「Japanese Photographer Today and It's Origin」(ポローニャ近代美術館他) 「紅と藍」(真壁仁との共著) 平凡社
1980 昭和55	58-59	ニューヨーク近代美術館所蔵のクロード・モネの大作《睡蓮》を同館で撮影、国立国際美術館(大阪)にその写真が展示される。8×10インチの大型カメラで山手線駅周辺の撮影を開始。	「睡蓮」(国立国際美術館、大阪) 「インスティテュート・オブ・デザイン40周年記念 The New Vision」展(カルチャー・センター、シカゴ) 「Photographers at the Institute of Design」展(ギルバート・ギャラリー、シカゴ) 「日本の庭園ー枯山水の庭」講談社 「彫一平櫛田中の世界」山陽新聞社 「蔵」東京海上火災創立100年記念誌、文藝春秋社 「イスラム 空間と文様」駸々堂出版 「邪馬台国幻想」(日本の心1) 集英社
1981 昭和56	59-60	琵琶湖周辺で十一面観音像を撮影。11月から翌年にかけて、大修復を終えた桂離宮をカラーとモノクロで再び撮影する。	「湖国の十一面観音」(西武百貨店大津ホール、滋賀／西武美術館、船橋他)
1982 昭和57	60-61	1ヶ月ほどシカゴに滞在して撮影を行う。	「シカゴ、シカゴ」、「ある日ある所」(フォト・ギャラリー・インターナショナル、以下 P.G.I.、東京) 「とんできた色紙」(フォトギャラリー・ワイド、東京) 「佐藤忠良の世界」現代彫刻センター 「湖国の十一面観音」岩波書店 「The New Vision」Apreture
1983 昭和58	61-62	紫綬褒章を受章。	「シカゴ、シカゴ II」、「山の手線・29」(P.G.I.、東京) 「桂離宮」(西武百貨店大津ホール、滋賀／西武美術館、船橋他) 「シカゴ、シカゴ その2」キヤノンクラブ／キヤノン販売、リポート(上製本) 「桂離宮 空間と形」岩波書店 (日本、ドイツ、アメリカ、イタリア、スイスで同時出版)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
1984 昭和59	62-63	20×24インチサイズのポラロイド・カメラによるシリーズ「包まれた食べ物」を制作。母・美根88歳で没。	「芸術としての写真・その誕生から今日まで シカゴ美術館のコレクションから」(国立国際美術館、大阪) 「色とことば」(石元滋との共著、私家版)
1985 昭和60	63-64		「とんできた色紙II」(フォトギャラリー・ワイド、東京) 「パリ・ニューヨーク・東京」(つくば写真美術館 '85、茨城／宮城県美術館)
1986 昭和61	64-65	ニューヨーク滞在中に、セントラルパークで「落ち葉」撮影(あるいは前年)	「街・人・かたち」(P.G.I.、東京) 「シカゴ、シカゴ 1942-1982」(近鉄百貨店、大阪)
1987 昭和62	65-66	「花」を撮影。この頃から「落ち葉」「空き缶」「雪のあしあと」などを撮影。	
1988 昭和63	66-67	木村伊兵衛賞の審査員を勤める(～1991年まで)	「HANA」、「日本の写真家8人展」(P.G.I.、東京) 「京の手わざ」学藝書林 「HANA」求龍堂
1989 平成元年	67-68		「KATSURA」(P.G.I.、東京) 「石元泰博写真展 その感性と視覚 1948-1989」(西武百貨店大津ホール、滋賀／翌年、有楽町アート・フォーラム、東京) 「現代イギリス陶芸家 ルーシー・リー展」(草月会館、大阪市立東洋陶磁美術館、監修＝三宅一生、構成＝亀倉雄策)(撮り下ろし写真提供) 「HANA」(英語版) クロニクル・ボックス、サンフランシスコ ポートフォリオ「KATSURA」フォト・ギャラリー・インターナショナル ポートフォリオ「KATSURA」カナダ建築センター
1990 平成2	68-69	日本写真協会年度賞受賞。	「東京ー都市の視線」(東京都写真美術館／パリ16区区役所フェスティバルホール)
1991 平成3	69-70		「SITE WORK: Architecture in Photography since Early Modernism」展(フォトグラファーズ・ギャラリー、ロンドン) 「日本写真の転換ー1960年代の表現」(東京都写真美術館) 「写真の1955-1965 自立した映像群」(山口県立美術館) 「写真家は何を見たか 1945-1960」(コニカブラザ、東京) 安藤忠雄著「ライカ」日本電気硝子(写真提供)
1992 平成4	70-71	日本写真協会功労賞受賞。	「落ち葉とあき缶」(P.G.I.、東京) 磯崎新著「磯崎新の建築30」六耀社(写真提供)
1993 平成5	71-72	勲四等旭日小綬章を受章。第61回式年遷宮で伊勢神宮の撮影を行う。	内藤廣著「海の博物館」内藤廣建築設計事務所(撮り下ろし写真提供)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
1994 平成6	72-73	アルル国際写真フェスティバルでマスター・オブ・フォトグラフィーを受賞。	『Yasuhiro Ishimoto: KATSURA and Recent Works (アルル国際写真フェスティバル)』
1995 平成7	73-74	よんでん芸術文化賞、桑沢特別賞を受賞。	「雲、紙、雪のあしあと」、『伊勢神宮』(P.G.I.、東京) 「東京国立近代美術館と写真 1953-1995」(東京国立近代美術館フィルムセンター) 「記録・創造する眼 戦後50年 日本現代写真史展」(日本橋・三越、東京/ナビオ美術館、大阪) 『伊勢神宮』(解説=磯崎新・稲垣榮三)岩波書店 岡田新一著『建築の肉体化への道程』(岡田新一著)彰国社(写真提供) 『The Museum of Mordern Art, Gunma: ARATA ISOZAKI』Phaidon, London (写真提供)
1996 平成8	74-75	平成8年度文化功労者に選ばれる。	「石元泰博展—現在の記憶」(東京国立近代美術館フィルムセンター) 「石元泰博 山の手線・29」(ギャラリー・アートグラフ、東京) 「色と遊ぶ」(P.G.I.、芝浦、東京) 「日本の写真—内なるかたち・外なるかたち 第二部 戦後写真の変容」(東京都写真美術館) 「現代の写真」(横浜美術館、神奈川) 「1953年ライトアップ:新しい戦後美術像が見えてきた」(目黒区美術館、東京) 「When Harry Met Aaron: Chicago Photography 1946-1971」(現代写真美術館、コロンビア・カレッジ、シカゴ) 「Together Again」(ギャラリー312、シカゴ) 「Chicago Photography 1935-1965」(ジェームズ・ダンジガー・ギャラリー、ニューヨーク)
1997 平成9	75-76	この頃から「水」「人のながれ」シリーズを撮影。「1997年度 第三回 ヤング・ポートフォリオ」展(清里フォトミュージアム)審査員(他、篠山紀信、細江英公)。	「Chicago Years シカゴ時代」(P.G.I.、東京) 「Yasuhiro Ishimoto: The Chicago Years」(ローレンス・ミラー・ギャラリー、ニューヨーク) 「石元泰博作品展—桂離宮」(キヤノンワンダーミュージアム、千葉) 「石元泰博写真展 モネ・睡蓮」(ミツムラ・アート・プラザ、東京) 「都市のイメージ:東京国立近代美術館の写真コレクションより」(東京国立近代美術館) 『石元泰博』(日本の写真家 26) 岩波書店
1998 平成10	76-77		「水と人のながれ」、『KATSURA』(P.G.I.、東京) 「石元泰博展—シカゴ、東京」(東京都写真美術館、東京) 「Ise」(シカゴ美術館) 「Yasuhiro Ishimoto」(ギャラリー・カメラ・オブスキュラ、パリ) 「Car Culture—20世紀写真に見る車社会」(清里フォトアートミュージアム、山梨) 「Waterproof」(エキスポ'98、リスボン)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
			「日本の美を撮る 渡辺義雄 土門拳 石元泰博」(トーランス・アート・センター、カリフォルニア) 「奈良市制 100周年記念 建築写真家展」(主催:世界建築博覧会協会)(奈良市写真美術館)
1999 平成11	77-78	ロングインタビュー(聞き手:藤森照信)「連載:戦後モダニズム建築の軌跡・丹下健三とその時代 14 “レイクショアドライブで練習して 次に撮った建築がピースセンターで、その次が桂”」が『新建築5月号』(新建築社)に掲載される。	「Yasuhiro Ishimoto」(ヘルテン国際写真フェスティバル '99、ヘルテン・ドイツ) 「YASUHIRO ISHIMOTO: A Tale of Two Cities」(シカゴ美術館) 「石元泰博写真展—伝真言院曼荼羅」(国立国際美術館、大阪) 「ニューマンと石元:シカゴでの再会」(ステファン・デイター・ギャラリー、シカゴ) 「The World and the Ephemeral」(アルル国際写真フェスティバル)
2000 平成12	78-79	この頃、品川、汐留、お台場の再開発状況を8×10インチサイズの大カメラで撮影する。	「高知県立高知農業高等学校創立110周年記念 OB四人展」(高知県立高知農業高等学校) 「Yasuhiro Ishimoto: Photographs 1950-1995」(Imagerie、ラニオン・フランス) 「Yasuhiro Ishimoto Photographs: Traces of Memory」(クリーブランド美術館) 「視点—写真家から見た人、自然、環境」(日本アムウェイ株式会社本社アートギャラリー、東京) 「アメリカン・ドリームの世界展」(愛知県美術館) 「P.G.I. ギャラリー・アーティスト展」(P.G.I.、東京) 「写された国宝—日本における文化財写真の系譜」(東京都写真美術館他巡回)
			内藤廣著『安曇野ちひろ美術館』内藤廣建築設計事務所(撮り下ろし写真提供)
2001 平成13	79-80		「石元泰博展 1946-2001」(高知県立美術館) 「石元泰博写真展 顔」、『P.G.I. Twenty Years』(P.G.I.、東京)
2002 平成14	80-81	この頃から、ノーファインダー中心に渋谷、新宿で道行く人を撮影。	「開館50周年記念 コレクションのあゆみ 1952-2002」(東京国立近代美術館) 「Taken by Design: Photographs from the Institute of Design, 1937-1971」(シカゴ美術館) 「Yasuhiro Ishimoto: Selected Works」(ステファン・デイター・ギャラリー、シカゴ)
2003 平成15	81-82		「街角 2002-03」、『桂離宮 1981-82』(P.G.I.、東京) 「日本の美を撮る」(国際交流基金ソウル文化センターイヨンホール) 「Yasuhiro Ishimoto: Katsura Villa」(ローレンス・ミラー・ギャラリー、ニューヨーク) 「Yasuhiro Ishimoto」(ギャルリ・ド・テアトル、カシャン・フランス)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
			「日本写真史展」(ヒューストン美術館) 「色とかたち」平凡社 内藤廣著『倫理研究所富士高原研修所』内藤廣建築設計事務所 (撮り下ろし写真提供)
2004 平成16	82-83	石元泰博全作品を高知県(高知県立美術館)に寄贈することが決定される。	「街かどーシカゴ、渋谷ー」(キヤノンサロンS、東京) 「写真展 地球を生きる子供たち」 (Bunkamura ザ・ミュージアム、東京) 「刻 (moment)」平凡社
2005 平成17	83-84	紺綬褒章を受章。高知県文化賞を受賞。	「シカゴ 1966」(P.G.I.、東京) 「石元泰博写真展 都市への視線」 (ギャラリー・エー・クワッド、東京) 「庭園植物記展」(東京都庭園美術館) 「石元泰博写真展 シカゴ、シカゴ」(ぎやらりー807、北海道)
2006 平成18	84-85	2月、半世紀にわたり石元のパートナーとしてきた良きアシスタントとして共に歩んできた滋子夫人没。4月に「石元滋子さんを偲ぶ会」(五反田・東京デザインセンター)を催し、「滋子 遺文抄」を参会者に配布。「石元泰博 ロングインタビュー～誕生から現在まで～」が「写真年鑑2006」(日本カメラ社)に掲載される。	「Yasuhiro Ishimoto」(ギャルリ・カメラ・オブスキュラ、パリ) 「Yasuhiro Ishimoto “On The Beach”」(P.G.I.、東京) 「キヤノンフォトコレクション展」(’06 倉敷フォトミユラル、岡山) 「電車にみる都市風景」(パルテノン多摩、東京) 「パラレル・ニッポン 現代日本建築展1996-2006」[光と影ーLight & Shadow](東京都写真美術館)
2007 平成19	85-86		「シブヤ、シブヤ」(P.G.I.、東京) 「The Other Side of Light: Shadow from the Photography Collection」,「When Color Was New」 (シカゴ美術館) 「Joy of Color」(ローレンス・ミラー・ギャラリー、ニューヨーク) 「シブヤ、シブヤ」平凡社
2008 平成20	86-87	滋子夫人三回忌の会で『石元泰博+滋子 ふたりのエッセイ』(私家版)を参会者に配布。内藤廣と石元とのロング対談「著書の解題10 『KATSURA』・『桂』・『桂離宮』ー石元泰博」が『INAX REPORT No. 176』(INAX)に掲載される。	「建築の記憶」(東京都庭園美術館) 「東京」(P.G.I.、東京) 「water」(21_21 デザインサイト、東京) 「20世紀の写真」展(千葉市美術館) 「土佐市市制施行50周年記念事業 石元泰博写真展」 (ウェディングプラザ寿苑1階催事場) 「めぐりあう色とかたち」平凡社
2009 平成21	87-88		「色とかたち」(P.G.I.、東京) 「日本人の自画像 写真が描く戦後1945-1964」 (世田谷美術館、東京) 「土門拳生誕百年特別企画 石元泰博フォト・ギャラリー<シカゴ、シカゴ>」(土門拳記念館、山形) 「昭和 写真の1945-1989」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川) 「Ways on Seeing: The Photography of Ishimoto Yasuhiro」(ヒューストン美術館)

年号	年齢	略歴	展覧会歴、出版歴
			「石元泰博 [多重露光]」 (武蔵野美術大学美術資料図書館、東京) 「現代イギリス陶芸家 ルーシー・リー展」図録復刊 (監修=三宅一生、写真=石元、構成=亀倉雄策) 求龍堂 「石元泰博 [多重露光]」武蔵野美術大学美術資料図書館
2010 平成22	88-89		「石元泰博 桂離宮」(銀座・松屋、東京) 「石元泰博写真展」(水戸芸術館現代美術センター、茨城) 「KASTURA: Picturing Modernism in Japanese Architecture, Photographs by Ishimoto Yasuhiro」 (ヒューストン美術館) 「KATSURA: The Photographs of Ishimoto Yasuhiro」 (ロサンゼルス・UCLA建築学部、イリノイ工科大学ケンパールーム・アートギャラリー-他アメリカ、カナダ、ヨーロッパ各地を巡回、2011年も継続) 「桂離宮」六耀社 「KATSURA Picturing Modernism in Japanese Architecture」(中森康文著) ヒューストン美術館、イェール大学出版 「石元泰博一写真という思考」(森山明子著) 武蔵野美術大学出版局 「石元泰博 (さんを撮った) 写真集 イシモト、イシモト」(嘉瀬井新一、近藤龍治共著) 私家版
2011 平成23	89-90	国際文化会館にて対談「写真家 石元泰博と戦後日本モダニズム芸術:『桂』を中心に」(聞き手: 米国ヒューストン美術館写真部門キュレーター・中森康文氏)が催される。第45回造本装幀コンクールで、『桂離宮』(デザイン=太田徹也、印刷=東京印書館)が経済産業大臣賞と日本印刷産業連合会会長賞を、「石元泰博一写真という思考」(造本=杉浦康平・佐藤篤司)が東京都知事賞をそれぞれ受賞する。	「写真家・石元泰博の眼ー桂、伊勢」(高知県立美術館) 「石元泰博作品展 両界曼荼羅」(P.G.I.、東京) 『両界曼荼羅 東寺蔵 国宝「伝真言院両界曼荼羅」の世界』平凡社
2012 平成24	90	2月6日、都内の病院にて死去。90歳。正四位と旭日重光章が授与される。	「石元泰博 写真展ー桂離宮1953,54-」(神奈川県立近代美術館 鎌倉、神奈川) 平成24年度市町村立美術館活性化事業 第13回巡回展「高知県立美術館所蔵 写真家 石元泰博 ー時代を超える静かなまなざしー」(今治市河野美術館、文化フォーラム春日井、佐世保市博物館島瀬美術センター)